

『初期三世紀ギリシャ・キリスト教著作家全集』の編集に対するアドルフ・フォン・ハルナックの影響について¹

On the Influence of Adolf von Harnack in the Editing of *Die Griechischen Christlichen Schriftsteller Der Ersten Drei Jahrhunderte*

戸根 裕士
Hiroshi Tone

キーワード

アドルフ・フォン・ハルナック、ギリシャ・キリスト教著作家全集、古代キリスト教史研究

KEY WORDS

Adolf von Harnack, *Die Griechischen Christlichen Schriftsteller*, Studies on the antique Christian history.

要約

当論文では『初期三世紀ギリシャ・キリスト教著作家全集』の編集に対するアドルフ・フォン・ハルナックの影響の所在を特定する。本来この編集作業は文献学又は歴史学の手続きで遂行されるはずが、ハルナックの独自の神学的関心はその編集に伺えると先行研究では指摘されてきた。そこで本論では先ず、ハルナックの想定する著作の選定基準とその影響を分析したい。次に校訂済みの各巻を承認する際の要点を整理する。その結果、この編集に関するハルナック独自の神学的関心を特定することは困難である点が判明する。その上で、その編集に対するハルナックの影響に関して言えば、部分的に必要な作業を適任者に委嘱して協働を試み、国家の要望に沿う計画を立案して資金を獲得した点に影響があるといえる。

SUMMARY

This study was undertaken in order to specify the influence of Adolf von Harnack on the editing of *Die Griechischen Christlichen Schriftsteller Der Ersten Drei Jahrhunderte*. Several studies have demonstrated that his original and theological interests had an influence on this editing, although it originally needed philological and historical procedures. This fact leads us to question the way in which this work was edited. Therefore, I analyze the requirements for the selection of works. Then I examine the reason why the revision of texts was approved. It follows that it is difficult to precisely determine Harnack's original and theological interests in this editing. Concerning his influence on this editing, it is important to point out his activity in making plans to assign partial works to the appropriate researchers and his drafting of attractive proposals to obtain funds from the government.

序論

アドルフ・フォン・ハルナック (A. v. Harnack, 1851–1930) に関する研究では、その多面的な活動に注目が集まってきた。ハルナックの著作といえば、先ず代表的な『キリスト教の本質』(*Das Wesen des Christentums*)²が思い浮かぶかもしれないが、その活動の実態は神学的な著述に限定されず、その他にも王立図書館 (Königliche Bibliothek) の館長やプロイセン王国学術アカデミー (Königlich-Preussische Akademie der Wissenschaft, 以下アカデミーと略記する) の総裁まで務めており、多岐に及ぶものであった³。そこで当論文では、その多面的な活動の内のアカデミーにおけるハルナックの活動の意義を検討する。即ち、政府の合意を得た特定の目的の為に複数の研究者が関与して協働することを支援する組織において、ハルナックは如何なる影響を及ぼしたのかという点に焦点を当てる。

そのハルナックが関係したアカデミーでの活動の内、代表的なものは『初期三世紀ギリシャ・キリスト教作家全集』(*Die Griechischen Christlichen Schriftsteller Der Ersten Drei Jahrhunderte*, 以下GCSと略記する)⁴の編集であった⁵。このGCSの編集とは、アカデミーが主導する様々な分野での全集作成の一環に当たる。こうしたアカデミーの全集作成の背景には、学問を工業化に喩える当時流行した考え方があった⁶。それは国家の財政支援の下で、複数の研究者が役割を分担し、協力し合って目的を達成するという考え方である⁷。そして実際にハルナックが1890年にアカデミーに所属する以前にも、そのような例として『ギリシャ語碑文全集』(*Inscriptiones Graecae*) や『アリストテレス全集』(*Aristoteles-Ausgabe*) が編集されている⁸。そう

した全集作成の一環として古代キリスト教文献の編集が課題に挙げられた際、新たな協力者の一人として指名されたのが当のハルナックであった。けれども当初はアカデミーに神学者は所属しておらず、古典的な文献を編集する作業に神学者を加入させる考えには反対意見が多かった⁹。しかし当時アカデミーの会長であったテオドール・モムゼン (T. Mommsen, 1817-1903) がその説得の為に、ハルナックの神学的な能力ではなく、それよりもキリスト教の歴史に関する知見の豊富さを強調したので¹⁰、ハルナックは1890年にアカデミーに所属することが出来た。そして教父委員会 (Kirchenväterkommission) を設立して GCS の編集に携わることになる。

こうした研究の経緯を踏まえて先行研究では、GCS の編集に対するハルナックの影響が如何なる観点に伺えるかという点に注目が集まった。ウォルター・エルテスター (W. Eltester, 1968) によれば、GCS に所収される著作の選定基準は「ハルナックの神学的関心」¹¹により決定されたという。即ち、ハルナックは膨大な資料を選別する際に、その表記や文章の種類ではなく内容にのみ着目し、その中から初期三世紀間の文献に独自の価値を見出した¹²。その文献の価値とは、キリスト教の固有の価値やローマ帝国にて受容される過程が明確に理解できることであった¹³。よってハルナックは GCS に収容する著作の選定基準を初期三世紀間の著作と定めたという¹⁴。しかし、こうした検討の際にエルテスター (1968) は、ハルナックの GCS の構想に関する記述の要約だけを根拠にしており¹⁵、ハルナックの原文の引用とそれに対する解釈が提示されておらず、その要約が不正確もしくは不十分である可能性が存在していた。

また別の観点ではあるがハルナックの生前に、そのギリシャ語能力の不足が GCS の編集に影響していると指摘する意見があった。その意見の代表的な例は、ウルリヒ・フォン・ヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフ (U. v. Wilamowitz-Moellendorff, 1899) の批判であった。即ちヴィラモーヴィッツは「ハルナックが全くギリシャ語を理解していない」¹⁶と批判し、そのギリシャ語の無理解が原因となって GCS の編集が不適切になることを危惧した。けれども、このヴィラモーヴィッツの批判は、ハルナックがアドルフ・ユーリッヒャー (A. Jülicher, 1857-1938) に宛てた手紙の中で紹介しているに過ぎず、その記述だけでは依然としてヴィラモーヴィッツの批判の経緯や背景が不明確なまま留まっている。

そこで本論文では先行研究の不十分な点を考慮して、次のように本論を展開する。即ち第一章では、GCS の構想に関するハルナックの全記述を引用しつつ読解し、その背後に伺えるハルナックの様々な関心を整理する。その際に、その構想と実際の選定の間の関係に着目し、構想の実現に如何なる過程と配慮が必要であったのかという点を明確にする。更にハルナックがその GCS の構想の実現の為に、財団や政府に何

度か資金援助を申請した事実にも注目する。それから第二章では、各巻の本文の承認を巡るヴィラモーヴィッツの批判と、それに対するハルナック側の弁明を比較し、その対立の経緯を説明する。そして GCS の構想の時点から、その編集にハルナックが関与することが批判されていた事実に注目し、ヴィラモーヴィッツの批判の背景を検討する。そこから双方で重要視する観点の、構想時から継続する相違を明確にする。こうした検討の結果、GCS の構想時から実際の選定にまで通底するハルナックの、断片的な資料の再構成に対する関心に注目し、GCS の編集に対するハルナックの影響の所在を特定したい。

1. GCS に所収する文献を選定する基準に関するハルナックの構想

まずは、GCS に所収する著作を選定するに当たってハルナックが如何なる構想を抱いていたのかという点を検討する。確かにアカデミーに所属した理由は古代キリスト教文献の編集であったが、それでも只文献の年代が古く、そしてキリスト教に関係していれば如何なる文献でも編集の対象になるかという点、そういう訳でもない。また対象の文献を選定したとしても、その文献に関する様々な伝承の検討が問題になってくる。更に他の古代キリスト教文献全集も既存している訳であるから、それらとの差異化を如何に図るべきか。ハルナックは GCS に所収する文献を選定する際の課題に、次の二点を挙げている。それは第一に「宗教としてのキリスト教に関する最古の真性の文献 (Die ältesten genuinen Quellen der christlichen Religion) を編集すること」¹⁷であり、第二に「カトリック教会の生成 (Das Werden der katholischen Kirche) を明確にすること」¹⁸である。以下では、その各々のハルナックの選定基準を整理する。

1.1. 宗教としてのキリスト教に関する最古の真性に関する文献

ハルナックのいう GCS の編集の第一の課題は「宗教としてのキリスト教に関する最古の真性の文献を編集すること」であった¹⁹。しかし、この内容を理解しようとすると幾つかの疑問が湧いてくる。ここでいう「宗教としてのキリスト教」(Christliche Religion) とは、総称の意味での「キリスト教」(Christentum) とは異なる意味であるのか。又は古代キリスト教文献を扱うことが前提であるけれども、その内の「最古」とは如何に特定出来るのか。更に「真性」というからには、何を以ってその性質を認定出来るのか。以下では、こうした疑問に対するハルナックの見解を説明する。

1.1.1. 「宗教としてのキリスト教」

まずハルナックの云う「宗教としてのキリスト教」という考え方は、総称の意味での「キリスト教」と同一視出来ない。というのも、ハルナックにとって「宗教としてのキリスト教」とは、「ギリシャ人やローマ人の敬虔さが成熟したもの」²⁰に当たるからである。従ってハルナックの理解では、イエス・キリストの教え以来伝来する教説がそのまま編集の対象になるのではなく、「初期三世紀間に生じた宗教としてのキリスト教」²¹だけが課題となる。こうしたハルナックの理解から読み取れるのは、キリスト教をギリシャやローマの文化圏に限定的に位置づけて把握しようとする態度であった。

しかし、このハルナックの態度自体は独自のものではない。ハルナック自身が語る様に、こうした態度は「何も新しくなく」²²、実の所はアルブレヒト・ベンヤミン・リツチュル (A. B. Ritschl, 1822-1889) の見解に「単に連なっている」²³に過ぎないのであった。そしてこのリツチュルの研究に連なる背景に、フェルディナンド・クリスティアン・バウア (F. C. Baur, 1792-1860) の研究に対する批判が存在する。そのバウアの見解とは、キリスト教の発展において重要な点は、十二使徒の内の「内的な緊張関係」²⁴であったとする態度であった。そしてハルナックはこの見解を念頭に置いて、「周辺のギリシャ・ローマ圏との密接な関係」²⁵の重要性を対置した。

1.1.2. 「最古」

次に GCS で編集する古代キリスト教文献に挙げられた「最古」という特徴について整理する。前述の通り GCS の編集の対象となるキリスト教は、「ギリシャ人やローマ人の敬虔さが成熟した」在り方に限定されるのであるから、そのキリスト教文献の「最古」といったところで、福音書やその周辺の文献を扱うことではない点は想像がつく。では、その限定的なキリスト教の在り方の「最古」とは如何に特定出来るのか。

ここでハルナックの強調するのは、「四・五世紀の膨大な文献の背後」²⁶という観点である。ハルナックによれば、四・五世紀のキリスト教の文献には重要な意義が存在するという。即ちそれらの文献とは、中世から第一次世界大戦までの欧州の「世界観、心情、文化」²⁷の核心を形成したものであった。こうしたハルナックの見解を参照すると、「最古」のキリスト教文献が四・五世紀の文献の「背後」に位置づけられるということは、その「最古」のキリスト教文献に、中世以降に欧州で形成されるキリスト教的世界観、心情、文化に関するその形成過程たる原点が確認し得るということである。即ち、四・五世紀の文献の形成過程たる原点という意味で以って「最古」という表現が採用されたのであった。

けれども、この「最古」のギリシャ・ローマ圏のキリスト教文献に限定しさえ良ければ、何も GCS として文献の範囲をギリシャ作家にだけ限定しなくてもよかつたのではないか。では、何故あくまでもギリシャ作家に限定する必要があったのか。

ここで着目すべきは、「ラテン語の文献に関してはウィーンの姉妹分に当たるアカデミーが担っている」²⁸というハルナックの指摘である。そして、ラテン語文献に比べてギリシャ語文献の体系的な整理は不十分であり、それをプロイセン王国のアカデミーで担うことには価値があると述べられた²⁹。その他にも、ハルナックが1891年に官庁に補助金を申請した際の記述を参照すると、次のように述べられている。「ウィーンの学術アカデミーは二十五年前から、ラテン教父全集に着手している。それに比べて当アカデミーの計画は限定的であるが、対象文献の歴史的な意味合いを考慮すると一層重要な研究であることが理解出来る。即ち、最古のキリスト教の成立から始まり、帝国の教会として皇帝に認可されるまでの（新約聖書とラテン語文献は除く）文献的遺産が出版されるのである」³⁰。ここでいうウィーンの学術アカデミーの全集とは『ラテン教会作家全集』（*Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum*, 以下 CSEL と略記する）³¹のことである。従ってこの記述を参照すると、GCS の構想の段階において CSEL に対する対抗意識が存在し、その CSEL と比較して GCS の意義は、歴史的側面の明確化に存すると理解出来る。

この1891年の申請書と同様の、ラテン語文献中心の CSEL に対する対抗意識や、古代キリスト教の歴史的側面の強調という GCS の特徴の構想は、1893年の再度の補助金申請の書類の中にも確認出来る³²。更に1896年の個人財団への費用補助の申請の時にも、CSEL ではラテン語文献を扱うのに対して、GCS ではギリシャ語文献が選定の対象である点が強調されている³³。

1.1.3. 「真性」

続いて GCS が編集の対象とする古代キリスト教文献の特徴として「真性」という観点が挙げられている点を説明する。すると前述した様に、GCS の編集の対象がギリシャ・ローマの文化の中で成立した限定的なキリスト教である点を考慮すると、ここでいう文献の「真性」とは、それらの文化の受容においても変化しないキリスト教的内容の正統性を指示するのであろうか。しかし、こうした疑問の立て方は不正確であることが分かる。即ちハルナック曰く、「真性」とは文献の内容ではなく、文献の状態のことを意味しているのであった。言い換えると、文献に関する伝承の整理の程度が重要であった。その訳を以下で説明する。

ハルナックが目指すのは、シリア正教会やアルメニア正教会、コプト正教会などに保存されている資料である³⁴。即ちこれらの教会には、ゲルマン系諸民族やロシア

正教によって処分されることなく、初期三世紀間のキリスト教文献が各地方の言語で翻訳されて保存されているという³⁵。従ってハルナックがGCSで試みたことは、或る文献を「真性」な状態にすべく、多言語で翻訳されて伝達されてきた資料の内容も考慮して、一層完全な校訂を行うことであった。

しかし、そうした多言語での膨大な資料をハルナック一人で整理出来るのであろうか。ここで注目したいのは、1893年から発表されたハルナックの『エウセビオスまでの古代キリスト教文献の歴史』(*Geschichte der altchristlichen Litteratur bis Eusebius*)³⁶という著作の存在である。この著作の目的とは、GCSが適切に編集できるよう、事前に「古代キリスト教文献の成立と伝承の一覧」³⁷を作成することであった。但しハルナック一人でその大部の作業を完遂するのは容易ではなく、その一部を他の研究者に委嘱している。例えば歴史神学者のゴットリープ・ナサニエル・ボンウェチュ(G. N. Bonwetsch, 1848-1925)はスラブ語文献を、コプト語学者のカール・シュミット(C. Schmidt, 1868-1938)はコプト語文献を、バルンハルト・ヴァイス(B. Weiss, 1827-1918)はアルメニア語文献を担当することになった³⁸。こうしてハルナックは作業を分担することで、現存する資料の全体像を迅速に把握し、如何なる文献を再構成する必要があるのかという点を検討した。

1.2. カトリック教会の生成の明確化に関する文献

ハルナックがGCSを編集する上で収集するに当たって、その古代キリスト教文献を選定する第二の基準とは、「カトリック教会の生成(das Werden der katholischen Kirche)を明確にすること」³⁹に関する資料であった。しかし、このハルナックの基準を理解しようとするとき幾つかの疑問に直面する。即ちここで「カトリック教会」とはいうものの「生成」が論点であることから、その生成とは、イエス・キリストによる集会からカトリック教会への成り立ちを指示するのか。またその「生成」を「明確にする」といったところで、如何なる観点に焦点を当てるといいのか。以下ではこうした疑問を念頭に置いて、ハルナックの選定の基準を説明したい。

先ず「カトリック教会の生成」という観点の中身を検討する。ハルナックによれば、その観点とは「如何にカトリック教会がローマ帝国に公認されて、独立した存在となっていたか」⁴⁰という点であった。即ちGCSで文献を収集する基準の「カトリック教会の生成」とは、イエス・キリストによる集会がカトリック教会へと自ら発展した系譜のことではない。寧ろここで要点になるのは、カトリック教会がローマ帝国の中で信任を得ていく過程である。即ち、ローマ帝国の迫害の中で自己の正当性を弁明し、また時に異端とされる教説を反駁した末に「独立した存在」と容認されるまでの経緯が重要であった。これを言い換えると、ローマ帝国との関係において「現世

の中で発展してゆく過程」⁴¹に焦点が当てられた。

では、そのようなローマ帝国内の社会の信頼を教会が得ていく過程を「明確にする」文献とは如何なるものであるのか。この点を説明するに当たってハルナックは古代キリスト教文献を三種類に分類する。第一に、新約聖書内の文章並びに二世紀中頃までの文献である⁴²。第二にコンスタンティヌス一世 (Constantine I, 在位：306-337)の時代までの護教的な著作である⁴³。第三にそれ以後から八・九世紀までの教会に関する文献である⁴⁴。そしてハルナック曰く、この第一の種類の文献では「宗教としてのキリスト教に固有なもの」⁴⁵が明瞭になるのに比べて、第二の種類の文献から理解出来ることは、カトリック教会がローマ帝国に公認されて自立するまでの様子であると述べた⁴⁶。従ってハルナックの分類する第二の種類の文献、即ちコンスタンティヌス一世の時代までの護教的な著作が GCS で収集する文献の対象に当たるとということが理解出来る。

では実際に、どのような著作が GCS に選定されたのかを確認する。先ず GCS の第一巻として1897年に出版されたのは、ハンス・アケリス (H. Achelis, 1865-1937) の校訂によるヒッポリュトス (Hippolytus, 170頃-235/236) の『註解と説教に関する著作集』 (*Exegetische und homiletische Schriften*) ⁴⁷であった。けれども、確かにヒッポリュトスは三世紀の著名なキリスト教作家ではあるが、前述の「カトリック教会の生成」という観点に照らしたところで、何故他の作家を差し置いて、わざわざヒッポリュトスが第一巻に選定されたのか。その理由はというと、実際の所ヒッポリュトスの内容如何に拘り無く、それよりもヒッポリュトス研究で著名な校訂の適任者が見つかったからであった。即ち校訂者たるアケリスは、1891年の時点で GCS と関係無く、ローマ・ドイツ考古学研究所 (Deutsches Archäologisches Institut Rom) の支援に依ってローマでの写本の調査を終えていたのである⁴⁸。だから GCS の前段階たる『エウセビオスまでの古代キリスト教文献の歴史』の中でも、ヒッポリュトスの研究に関してはアケリスに一任されていた⁴⁹。こうした同様の事情は、当時既にオリゲネス (Origen, 185頃-254頃) の研究で著名であったポール・ケチャウ (P. Koetschau, 1857-1939) が GCS の二・三巻でオリゲネスの著作を担当したこと⁵⁰にも伺える。従って実際に GCS に所収される著作の選定に、何よりも適任者の存否が重要であったのである。

2. GCS の校訂の承認を巡るヴィラモーヴィッツとハルナックの対立

続いて、ハルナックのギリシャ語能力の不足が GCS の編集に影響していると批判するヴィラモーヴィッツの見解の経緯と背景を説明する。そしてハルナックがその批

判に対して弁明している点に注目し、双方の見解の相違の理由を検討する⁵¹。

2.1. ヴィラモーヴィッツによる批判の経緯と背景

先ずヴィラモーヴィッツによる批判の経緯を説明する。事の発端は1899年にGCSの二・三巻として、ケチャウが校訂したオリゲネスの『ケルスス駁論』(*Contra Celsum*)が公刊したことであった。ただ事は上手く運ばず、パウル・ヴェントラント(P. Wendland, 1864–1915)がその本文の校訂は不十分であると批判したこと⁵²が後々問題になった。つまりこの批判が雑誌で公表される以前に教父委員会に伝わり、GCSの編集方針を巡って教父委員会内で対立が表面化したのであった。そしてヘルマン・アレキサンダー・ディール(H. A. Diels, 1848–1922)やヴィラモーヴィッツなどの古代ギリシャ語研究者は、ヴェントラントの批判を容認して、ケチャウの校訂に批判的な立場を取った⁵³。それに対してハルナックはケチャウの校訂の適切さを確認して、その校訂に対して批判的なヴェントラントの批判を退けた。結局、ヴェントラントの批判が原因となって既刊のケチャウの校訂が変更することにはならなかった。

しかしこの対立の過程で注目すべきは、古代ギリシャ語研究者の批判の矛先が当事者たるケチャウだけでなく、GCSの編集全体に向けられていた点である。そして前述のヴィラモーヴィッツの批判はこの同年1899年四月に記録されているので⁵⁴、ハルナックのギリシャ語能力に対する批判は、ケチャウの校訂の承認を巡る対立の一環であると考えられる。

但しこうしたGCSに携わる、神学者のギリシャ語能力に対する批判は、1899年の時点で初めて生じたものではない。そのことを証明するために古代ギリシャ語研究者のヘルマン・カール・ウーゼナー(H. K. Usener, 1834–1905)の批判を紹介する。ウーゼナーによると、ハルナックは1893年に『ペトロの福音書とペテロの黙示録の断片』(*Bruchstücke des Evangeliums und der Apokalypse des Petrus*)⁵⁵を公刊して、その中で原文のギリシャ語を復元しているが、古代ギリシャ語研究者の観点では、そのギリシャ語の表記が不適切であると考えられた。即ちハルナックの表記は「σκελοκοφθῆ」という奇怪な綴り⁵⁶であるが、実際はσκελοκοπηθῆが適切であると述べた。そしてウーゼナーは「神学者は独自のギリシャ語を知っている」⁵⁷と揶揄して、「ギリシャ教父に関する出版に関わって欲しくない」⁵⁸と述べていた。

このようなウーゼナーの批判を参照すると、ケチャウの校訂を巡る対立に関しては次のように理解出来る。即ち、GCSの構想の段階から神学者がGCSなどの資料の校訂に関わることへの批判が存在しており、その不満が1899年の対立において明確に表面化したのであった。

2.2. ハルナックの弁明の根拠

それでは次に、ヴィラモーヴィッツなどの古代ギリシャ語研究者の批判に対するハルナックの弁明を整理する。ハルナックはその批判に接して「それはその通りである」⁵⁹と述べて自身のギリシャ語能力の不十分さを容認する。けれどもモムゼンの「あらゆる点で満足な」⁶⁰校訂など不可能であるという立場を共有して、特にケチャウによる著作の伝承の研究を十分に評価し、既刊の内容の修正を容認しないという態度を示した⁶¹。即ちハルナックにとって校訂の承認の根拠には、文章の断片的な伝承の再構成という基準が、ギリシャ語の表記の基準に優先して適用された⁶²。これはGCSの編集におけるハルナックの基本的な態度であり、ハルナックは別の機会にカイザリアのエウセビオス (Eusebius of Caesarea, 260/265-339) などの編集を例に挙げて、著作の本文に関する表記などの「形式ではなく内容に特別な価値がある」⁶³と述べた⁶⁴。

それではこのケチャウの場合、如何にして著作の伝承の研究が十分価値があると評価されたのか。ここで注目したいのは、ケチャウが1899年に既に『古写本や『フィロカリヤ』におけるオリゲネスの『ケルスス駁論』に関するテキストの伝承：批判版の為の序論』(Die Textüberlieferung der Bücher des Origenes gegen Celsus in den Handschriften dieses Werks und der Philokalia. Prolegomena zu einer kritischen Ausgabe)⁶⁵という著作を出版している点である。そしてこの著作は『古代キリスト教文献史のテキストと研究』(Text und Untersuchungen zur Geschichte der altchristlichen Literatur、以下TUと略記する) というシリーズの第六巻の一部として刊行されたのであった。

ではここで、何故古代キリスト教文献に関しては、個別の著作の編集に先行して伝承の整理の研究が必要であるのかという点を考える。ハルナックの『エウセビオスまでの古代キリスト教文献の歴史』によるとその理由は、主な初期三世紀間のキリスト教の文献は一体となった著作として伝承されておらず、断片的な情報だけが散布しているからであった。このように一体となった著作の伝承が不在であるのは、その著作が意図的に削除されたり偽造されたりしたという点に理由があった⁶⁶。従ってその残された断片的な情報は、聖書注解書の引用や歴史書の引用、又は論争相手の引用の中などでしか保存されていなかった⁶⁷。よって個別の古代キリスト教文献を編集する為には、断片的な伝承を整理し、先ずまとまった内容に再構成する必要がある。

そこで再度ケチャウの研究に視点を戻す。前述の通りケチャウは、TUにて『ケルスス駁論』の伝承の校訂の研究を行って成果を出した。従ってGCSにて校訂済みの本文の承認を検討する際に、断片的な伝承の再構成は説得力があると容認された⁶⁸。故にケチャウの校訂を承認したハルナックの態度には相応の理由があったことが理解出来る。

結論

それでは改めて GCS の編集に対するハルナックの影響を整理する。

エルテスター（1968）は GCS の選定基準に注目し、ハルナックがその構想の際の初期三世紀間という期間の文献に特別な価値を容認したので、そこに「ハルナックの神学的関心」が確認出来ると指摘した。しかし構想における期間の設定に関していえば、初期三世紀間と規定するハルナックの理由は、そこに欧州のキリスト教的世界観、心情、文化の形成過程たる原点が存在するからであり、それを単にハルナック個人の「神学的関心」と評価することは難しい。またエルテスター（1968）はその期間の文献の特別な価値として第一にキリスト教の固有性、第二にローマ帝国での受容を挙げるが、本人の記述に則するとハルナックが構想時に重要視したのはその第二の点だけであった。

またヴィラモーヴィッツは、ハルナックのギリシャ語能力の不足が GCS の編集に影響を与えると批判的に指摘した。その批判の経緯は、ハルナックがギリシャ語表記の点では不適切に思えるケチャウの校訂を承認したことであった。こうした批判は GCS の構想時から古代ギリシャ語研究者の間で継続しているので、ヴィラモーヴィッツの批判もその一環に位置付けられた。それに対してハルナックは、古代キリスト教文献という特殊なケースでは、校訂の承認の際に重要な観点は断片的な伝承の再構成の成果であって、それは古代ギリシャ語の言語学的な観点に優先して採用されると弁明した。

これまでヴィラモーヴィッツの批判にしる、また後のエルテスター（1968）の研究にしても、GCS の編集に対する影響を確認する上で、その選定基準や本文承認の理由など、編集過程の一部にのみ焦点が当てられてきた。けれども本来、GCS の編集とは構想の段階からの持続的な作業であるので、GCS の構想時から実際の選定にまで継続するハルナックの配慮に着目したい。即ちそのハルナックの配慮とは、古代キリスト教文献の断片的な内容を再構成する文献学的な作業に対するハルナックの関心である。ハルナックの構想と実際の選定の関係に視点を移すと、ハルナックはその構想に基づき『エウセビオスまでの古代キリスト教文献の歴史』を企画して、多言語の膨大な文献の検証を適切な研究者に委嘱し、現存する資料の全体像と研究状況を俯瞰してから、如何なる文献を再構成する必要があるのかという点に気を配ったことが理解出来る。そしてその内の幾つかの文献を適切に校訂出来る研究者が見つければ、まず TU にて文献の再構成の研究を依頼し、その文献学的な成果を確認した後に GCS に所収することを容認したのであった。その他にもこうした作業には人件費や時間が掛ることから、ハルナックは1891年から1896年の間、政府や財団に資金援助を申請し

て必要な予算を獲得した。以上、こうした GCS の編集を可能にする為の配慮は、古代キリスト教文献を独自の構想の下で集成し編集する上で必要だったのである。従って、こうした GCS の構想から実現までの一連の過程を考慮すれば、GCS の編集に対するハルナックの影響が、部分的に必要な作業を適任者に委嘱して協働を試み、国家や財団の要望に沿う計画を立案して資金を獲得した点に伺えると見做すことが出来る。

注

- 1 本論文は2017年度日本基督教学会近畿支部会（2017年3月27日、関西学院大学）での研究発表に加筆修正したものである。
本論文の古代キリスト教に関する人物名の表記やその生年月日は『キリスト教大事典 改訂新版』（教文館、1963年）を参照する。
- 2 A. v. Harnack, *Das Wesen des Christentums: Sechzehn Vorlesungen vor Studierenden aller Fakultäten im Wintersemester 1899/1900 an der Universität Berlin gehalten von Adolf v. Harnack*, Hrsg. von C. D. Osthövener, Tübingen: Mohr Siebeck, 2012.
- 3 深井智朗（2009）「黒崎幸吉のアドルフ・フォン・ハルナック論：『新世』に掲載された『全集』未収録の論稿をめぐって」『聖学院大学総合研究所紀要』, 45号, 194頁。
- 4 Preussische Akademie der Wissenschaften. Kirchenväter-Kommission, *Die Griechischen Christlichen Schriftsteller Der Ersten Drei Jahrhunderte*, Berlin, 1897–1946. ハルナックがその編集に携わったのは1930年までである。この全集の名称は1946年以後、『初期ギリシャ・キリスト教著作家全集』（*Die Griechischen Christlichen Schriftsteller Der Ersten Jahrhunderte*）に変更し、更に1995年以降は編集元がベルリン・ブランデンブルク学術アカデミー（Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften）に変わり、『新版初期ギリシャ・キリスト教著作家全集』（*Die Griechischen Christlichen Schriftsteller Der Ersten Jahrhunderte. Neue Folge*）と名称を改めた。
- 5 他にもハルナックはアカデミー史の編纂にも携わっている（A. v. Harnack, *Geschichte der königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin*, Berlin: Stilke, 1901.）。
- 6 T. Mommsen's Erwiderung auf Antrittsrede in der Preussischen Akademie der Wissenschaften (1890), in: *Adolf von Harnack als Zeitgenosse - Reden und Schriften aus den Jahren des Kaiserreichs und der Weimarer Republik – Teil 2*, herausgegeben und eingeleitet von K. Nowak, mit einem bibliographischen Anhang von H.-C. Picker, Berlin: Walter de Gruyter, 1996, S. 981.
- 7 Ibid., S. 981.
- 8 J. Irmscher, Das Korpus der „Griechischen Christlichen Schriftsteller“ Historie, Gegenwart, Zukunft, in: *Das Korpus der Griechischen Christlichen Schriftsteller Historie, Gegenwart, Zukunft*, herausgegeben von H. Irmscher und K. Treu, Berlin: Akademie-Verlag, 1977, S. 1.
- 9 S. Rebenich, Die Altertumswissenschaften und die Kirchenväterkommission an der Akademie - Theodor Mommsen und Adolf Harnack -, in: *Die Königlich Preussische Akademie der Wissenschaften zu Berlin im Kaiserreich*, herausgegeben von J. Kocka unter Mitarbeit von R. Hohlfeld und P. Th. Walther, Berlin: Akademie Verlag, 1999, S. 210.
- 10 T. Mommsen's Erwiderung auf Antrittsrede in der Preussischen Akademie der Wissenschaften (1890),

- S. 981.
- 11 W. Eltester, Zum Geschichte der Berliner Kirchenväterkommission anlässlich der 75. Wiederkehr ihres Gründungsjahres, in: *Theologische Literaturzeitung* 93(1968), S. 12.
- 12 Ibid.
- 13 Ibid., S. 13.
- 14 Ibid.
- 15 Ibid.
- 16 Brief Harnacks an Adolf Jülicher vom 5. April 1889, Universitätsbibliothek Marburg, Nachlass Jülicher, MS. 695/381. (S. Rebenich, Der alte Meergreis, die Rose von Jericho und ein höchst vortrefflicher Schwiegersonn: Mommsen Harnack und Wilamowitz, in: *Adolf von Harnack - Theologe, Historiker, Wissenschaftspolitiker* -, herausgegeben von K. Nowak und O. G. Oexle, Göttingen: Vandenhoeck & Ruorecht, 2001, S. 50. を参照した。).
- 17 A. v. Harnack, Bericht über die Ausgabe der griechischen Kirchenväter der drei ersten Jahrhunderte (1916–1926), in: *Adolf von Harnack als Zeitgenosse - Reden und Schriften aus den Jahren des Kaiserreichs und der Weimarer Republik* -, herausgegeben und eingeleitet von K. Nowak, mit einem bibliographischen Anhang von H.-C. Picker, Berlin: Walter de Gruyter, 1996, S. 1128.
- 18 Ibid.
- 19 Ibid.
- 20 A. v. Harnack, Bericht über die Ausgabe der griechischen Kirchenväter der drei ersten Jahrhunderte (1891–1915), in: *Adolf von Harnack als Zeitgenosse - Reden und Schriften aus den Jahren des Kaiserreichs und der Weimarer Republik* -, herausgegeben und eingeleitet von K. Nowak, mit einem bibliographischen Anhang von H.-C. Picker, Berlin: Walter de Gruyter, 1996, S. 1079.
- 21 Ibid.
- 22 A. v. Harnack, Antrittsrede in der Preussischen Akademie der Wissenschaften, in: *Adolf von Harnack als Zeitgenosse - Reden und Schriften aus den Jahren des Kaiserreichs und der Weimarer Republik* -, herausgegeben und eingeleitet von K. Nowak, mit einem bibliographischen Anhang von H.-C. Picker, Berlin: Walter de Gruyter, 1996, S. 978.
- 23 Ibid.
- 24 Ibid., S. 977.
- 25 Ibid., S. 978.
- 26 A. v. Harnack, Bericht über die Ausgabe der griechischen Kirchenväter der drei ersten Jahrhunderte (1891–1915), S. 1079.
- 27 Ibid., S. 1078.
- 28 Ibid., S. 1079.
- 29 Ibid.
- 30 Akademiearchiv der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften, Kommission für spätantike Religionsgeschichte, II VIII, 167, Bl. 1. (S. Rebenich, *Theodor Mommsen und Adolf Harnack: Wissenschaft und Politik im Berlin des ausgehenden 19. Jahrhunderts*, Berlin: de Gruyter, 1997, S. 134. を参照した。).
- 31 Österreichische Akademie der Wissenschaften; Kaiserliche Akademie der Wissenschaften in Wien, *Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum*, Wien 1866–.

- 32 Akademiearchiv der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften, Kommission für spätantike Religionsgeschichte, II VIII, 167, Bl. 7. (S. Rebenich, *Theodor Mommsen und Adolf Harnack: Wissenschaft und Politik im Berlin des ausgehenden 19. Jahrhunderts*, S. 146. を参照した。).
- 33 Akademiearchiv der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften, Heckmann-Wentzel-Stiftung, II-XL, Bl. If. (S. Rebenich, *Theodor Mommsen und Adolf Harnack: Wissenschaft und Politik im Berlin des ausgehenden 19. Jahrhunderts*, S. 161. を参照した。).
- 34 A. v. Harnack, Bericht über die Ausgabe der griechischen Kirchenväter der drei ersten Jahrhunderte (1891–1915), S. 1080.
- 35 Ibid.
- 36 A. v. Harnack, *Geschichte der altchristlichen Litteratur bis Eusebius*, Leipzig: Hinrichs, 1893–1904.
- 37 A. v. Harnack, *Geschichte der altchristlichen Litteratur bis Eusebius: Bd. 1, Teil. 1 : Die Überlieferung und der Bestand*, Bearbeitet unter Mitwirkung von Erwin Preuschen, Leipzig: Hinrichs, 1893, S. V.
- 38 Ibid., S. VI.
- 39 A. v. Harnack, Bericht über die Ausgabe der griechischen Kirchenväter der drei ersten Jahrhunderte (1891–1915), S. 1080.
- 40 A. v. Harnack, Bericht über die Ausgabe der griechischen Kirchenväter der drei ersten Jahrhunderte (1916–1926), S. 1128.
- 41 A. v. Harnack, Bericht über die Ausgabe der griechischen Kirchenväter der drei ersten Jahrhunderte (1891–1915), S. 1081.
- 42 A. v. Harnack, Bericht über die Ausgabe der griechischen Kirchenväter der drei ersten Jahrhunderte (1916–1926), S. 1127.
- 43 Ibid.
- 44 Ibid.
- 45 Ibid.
- 46 Ibid.
- 47 G. Nath. Bonwetsch, H. Achelis, *Hippolytus Werke I: Die Kommentare zu Daniel und zum Hohenliede, Hippolyt's Kleinere exegetische und homiletische Schriften (GCS 1)*, Leipzig: Hinrichs, 1897.
- 48 Akademiearchiv der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften, Kommission für Kirchenväter, Nr. 1, Bl. 4. (S. Rebenich, *Theodor Mommsen und Adolf Harnack: Wissenschaft und Politik im Berlin des ausgehenden 19. Jahrhunderts*, S. 142. を参照した。).
- 49 A. v. Harnack, *Geschichte der altchristlichen Litteratur bis Eusebius: Bd. 1, Teil. 1 : Die Überlieferung und der Bestand*, S. VII.
- 50 P. Koetschau, *Origenes Werke I : Die Schrift vom Martrium. Buch I-IV Gegen Celsus (GCS 2)*, Leipzig: Hinrichs, 1899.
P. Koetschau, *Origenes Werke I: Buch V-VIII Gegen Celsus (GCS 3)*, Leipzig: Hinrichs, 1899.
- 51 S. Rebenich, *Theodor Mommsen und Adolf Harnack: Wissenschaft und Politik im Berlin des ausgehenden 19. Jahrhunderts*, S. 190–198. 参照。
- 52 P. Wendland, Rezension Paul Koetschau, Origenes Werk [1899], in: *Göttingische Gelehrte Anzeigen 161 (1899)*, Nr. 4, S. 276–304.
P. Wendland, Rezension Paul Koetschau, Origenes Werk [1899], in: *Göttingische Gelehrte Anzeigen 161 (1899)*, Nr. 6, S. 613–622.

- 53 A. v. Harnack, *Protokollbuch der Kirchenväter-Kommission der Preussischen Akademie der Wissenschaften 1897–1928*, Diplomatische Umschrift von S. Rebenich, Einl. und kommentierende Anm. von C. Markschies, Berlin: de Gruyter, 2000, S. 8–9.
- 54 Brief Harnacks an Adolf Jülicher vom 5. April 1889, Universitätsbibliothek Marburg, Nachlass Jülicher, MS. 695/381. (S. Rebenich, *Der alte Meergreis, die Rose von Jericho und ein höchst vortrefflicher Schwiegersohn: Mommsen Harnack und Wilamowitz*, S. 50. を参照した。).
- 55 A. v. Harnack, *Bruchstücke des Evangeliums und der Apokalypse des Petrus*, Leipzig: Hinrichs, 1893.
- 56 Brief Nr. 266., in: *Hermann Diels, Hermann Usener, Eduard Zeller. Briefwechsel*, hg. v. Dietrich Ehlers, Berlin: Akademie Verlag, 1992, S. 443.
- 57 Ibid.
- 58 Ibid.
- 59 Brief Harnacks an Adolf Jülicher vom 5. April 1889, Universitätsbibliothek Marburg, Nachlass Jülicher, MS. 695/381. (S. Rebenich, *Der alte Meergreis, die Rose von Jericho und ein höchst vortrefflicher Schwiegersohn: Mommsen Harnack und Wilamowitz*, S. 50. を参照した。).
- 60 A. v. Harnack, *Protokollbuch der Kirchenväter-Kommission der Preussischen Akademie der Wissenschaften 1897–1928*, S. 8–9.
- 61 Ibid.
- 62 一点付け加えておきたい。ハルナックの弁明に依れば、確かに校訂に関して言語的な批判があったとしても、写本の伝承などが十分明確であれば問題は無いということであるが、では実際の程度の言語的な基準まで許容されるのか依然として不明確さが残存する。この点に関して古代ギリシャ語研究者のディールも次の様に言及した。即ち「テキストの歴史的又は神学的意義」(Ibid., S. 8.) に関しては同意出来るが、「文法的又は文体的」(Ibid.) な観点では不満が残ると述べた。残念ながら筆者にこの言語学的な対立を評価する力量が無いので、このような論点が依然として残存している点を指摘する。
- 63 A. v. Harnack, *Bericht über die Ausgabe der griechischen Kirchenväter der drei ersten Jahrhunderte (1916–1926)*, S. 1128–1129.
- 64 こうしたハルナックの考え方に対してエルテスターは次の様な批判的な態度を取る。「ハルナックのキリスト教文献の歴史に対する考え方は、諸形式を無視して記録と見做すものであった。だから古代キリスト教文献の歴史の著作が GCS の準備段階のものと位置づけられても不思議ではない。ましてやそこで伝承や年代順が主な論点であると言ってもおかしくはないのである」(W. Eltester, *Zum Geschichte der Berliner Kirchenväterkommission anlässlich der 75. Wiederkehr ihres Gründungsjahres*, S. 12.)。
- 65 P. Koetschau, *Die Textüberlieferung der Bücher des Origenes gegen Celsus in den Handschriften dieses Werks und der Philokalia Prolegomena zu einer kritischen Ausgabe*, Leipzig: Hinrichs, 1889.
- 66 A. v. Harnack, *Geschichte der altchristlichen Litteratur bis Eusebius: Bd. 1, Teil. 1: Die Überlieferung und der Bestand*, S. XLII.
- 67 ハルナックはその他にも断片的な伝承の保存方法に以下の例を挙げている。即ち、旧約聖書や新約聖書の写本の付属物の中、教会所有の殉教者伝やカレンダーの中、ニカイア公会議以後の教化目的の文献の中、公会議の議事録の中、教会法の文献の中などが、そうした断片的な伝承の保存場所であった (Ibid., S. XLI–XLII.)。
- 68 こうした GCS と TU との補完的な関係は、ただケチャウの校訂の場合にのみ確認出来るものではな

い。例えばケチャウ以前に GCS の一巻としてアケリスによって公刊されたヒッポリュトスの校訂でも、それに対応する様に TU の第六巻の一部としてアケリスの『東方の教会法に関する最古の情報源：ヒッポリュトスの言及する法典』(H. Achelis, *Die ältesten Quellen des orientalischen Kirchenrechtes: Die Canones Hippolyti*, Leipzig: Hinrichs, 1891.) が存在している。